

2. ビール大麦「おうみゆたか」の播種期別の播種量と施肥方法（情報）			
[要約]			
「おうみゆたか」は、11月中旬～12月上旬播種では播種量3～6kgでできるだけ薄播き、12月下旬播種では播種量6kg程度とし、いずれの播種期とも中間追肥あるいは穂肥を増施すると、蛋白質含量の向上と収量の安定確保に有効である。			
研究室名	作物研究室	連絡先	086-955-0275

[背景・ねらい]

本県産ビール大麦は蛋白質含量の不適率（適正範囲 10～11%）が高く、その適正化が強く望まれている。また、播種適期である 11 月中旬の降雨や水稻の収穫遅れにより出芽不良や 12 月播きとなることも多く、収量や品質が不安定となっている。

そこで、新しく地域適応優良品種に採用された「おうみゆたか」について、播種期に応じた高品質、安定栽培法を明らかにする。

[成果の概要・特徴]

1. 11月中旬の播種適期から40日遅れた場合でも、出穂期は17～12日、成熟期は12～9日の遅れに縮小した（図1、2）。
2. 収量は播種期が12月24日以降になると低下した。蛋白質含量は全般に低く、播種期が早いほど、また、播種量が多いほど低くなった（表1）。
3. 11月14日播種では播種量3～6kgで中間追肥と穂肥を増施することにより、12月4日播種では播種量3kgで中間追肥を増施することにより、蛋白質含量が向上するとともに収量も増大した（表1）。
4. 12月24日播種では播種量を6kgとし中間追肥か穂肥を増施することにより、収量が増大するとともに蛋白質含量も向上した（表1）。

以上の結果から、苗立の多少は収量・品質に大きく影響するので、12月下旬までは圃場条件の好転を待って播種し苗立の安定確保を図るのがよく、播種期に応じた施肥を行うことで蛋白質含量の向上と収量確保が可能となる。

[成果の活用面・留意点]

1. 県中南部のドリル播栽培に適用する。
2. 「おうみゆたか」の蛋白質含量は「アサカゴールド」と同程度である（関連情報等）。
3. 播種量3、6、13kgは、それぞれ苗立数50、100、200本/m²を目安としている。
4. 穂肥施用時期は幼穂長10mm期とする。なお、窒素4kg/10a以上の穂肥は遅発穂の多発を招きやすいので避ける。

[具体的データ]

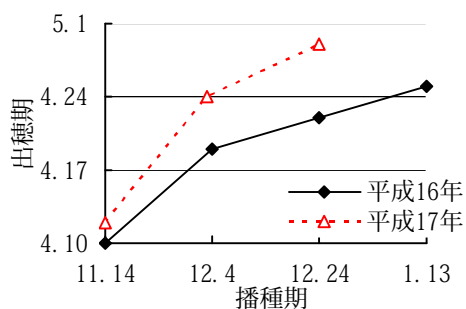


図1 播種時期と出穂期

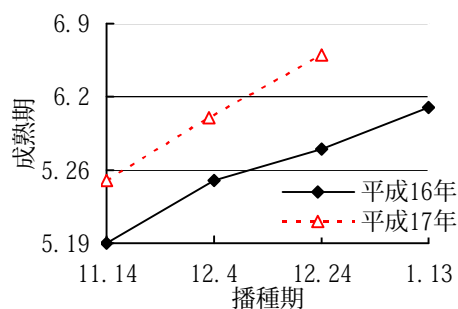


図2 播種時期と成熟期

表1 播種期、播種量、窒素追肥法と「おうみゆたか」の収量及び蛋白質含量 (平成16、17年平均)

播種量	施肥法 ^z 中間-穂肥	11月14日播種		12月4日播種		12月24日播種		1月13日播種 ^y	
		収量 kg/10a	蛋白質 %	収量 kg/10a	蛋白質 %	収量 kg/10a	蛋白質 %	収量 kg/10a	蛋白質 %
3kg	2-2	377	9.6	365	10.3	340	10.7		
	2-3	438	9.8	399	10.5	363	10.9		
	4-2	457	9.7	438	10.6	403	10.6		
	4-3	440	10.5	450	10.8	394	11.0		
6kg	2-2	396	9.5	398	9.4	375	10.1	200	10.6
	2-3	412	9.6	420	9.6	413	10.3		
	4-2	457	9.6	470	9.9	433	10.6		
	4-3	467	10.0	478	9.8	440	10.6		
13kg	2-2	405	9.6	402	9.3	363	9.9	292	10.3
	2-3	434	9.5	462	9.4	445	9.9		
	4-2	451	9.4	465	9.6	452	9.8		
	4-3	443	9.5	462	9.7	464	10.2		
平均		431	9.7	434	9.9	407	10.4	246	10.4

^z 施肥法は中間追肥(2月4日 磷加安44号)と幼穂長10mm期穂肥(NK化成)の窒素施用量 kg/10a で示す

別に基肥5kg(12月24日以降の播種は3kg 磷加安44号)施用

^y 1月13日播種は平成16年のみ実施

[その他]

試験研究課題・事業名：中国地域における麦類の高品質・安定多収栽培技術の確立

予算区分：受託

研究期間：平成15～17年度

関連情報等：平成14年度試験研究主要成果「二条大麦の地域適応優良品種『おうみゆたか』(技術)」